

ヨメナを論ず

(教材参考)

北村四郎

ヨメナは普通の植物圖鑑に出てゐるので植物の愛好者は誰でも見當はついてゐる。兒童でも春になるとヨメナを摘んで食べ秋になるとこれが野菊となつて野原を飾るのを知り、歌詠みはヲハギ、ウハギがヨメナであつて古來詠まれてゐるのはよく知つてゐる。今これを植物分類地理的に論ぜんとする。

處變れば品變るといふがヨメナに就いてもこの俚言が正しく當る。私の考へではヨメナに五種あつて各々特別な地域に生育してゐる。1)、東北、北陸、關東、及び信濃、甲斐、美濃、山城の山地、には通じて一種が分布しこの地域では處變れど品變らず、唯の一種であつて柚香菊即ちユウガギクがこれである。2)、東海道の諸國、近畿の低地、中國、四國、九州にはヨメナ(又はカンサイヨメナ)が分布してゐる。3)、シベリア、滿洲、北支那を経て朝鮮、九州一部、中國一部、に分布するオホユウガギク。4)、琉球、台灣、南支那、印度支那、印度に通じて産するコヨメナ。5)、台灣に産するザラヨメナ。即ち従來はヨメナもユウガギクも日本及び朝鮮に廣く分布する様に考へられてゐたのであるが私はユウガギクは中國、九州、朝鮮になく、關西のヨメナは關東、東北、北陸には無いと云ふのである。尙滿洲支那にはヤマヨメナ、ウスバヨメナを産すれども今は暫く除き置く。

ヨメナの上記五種を分類學的に區別すれば、

- 冠毛の短剛毛は $\frac{1}{4}$ mm. 長にして數少なく、果實は 2 mm. 莖は 30-50 cm. 葉は短毛を散生す……………**コヨメナ** *Kalimeris indica* (BLUME) SCHULZ-BIP.
- 冠毛の短剛毛は $\frac{1}{2}$ mm. - 1 mm. 長、莖は凡そ 100 cm. 内外 2.
2. 葉は兩面短毛を密生し、冠毛の短剛毛は $\frac{1}{2}$ mm. 長……………**ザラヨメナ** *Kalimeris Shimadae* KITAMURA
- 葉は兩面殆んど無毛、たゞ縁邊にのみ短毛を散生す 3.
3. 葉は質薄く、果實は 2.5 mm. 長、冠毛の短剛毛は $\frac{1}{2}$ mm. 長數少し……………**ユウガギク** *Kalimeris pinnatifida* KITAMURA
- 葉は質厚く、果實は 3-3.5 mm. 長、冠毛の短剛毛は $\frac{1}{2}$ -1 mm. 長 4.
4. 葉は披針狀橢圓形にして屢々羽狀中裂す、冠毛は $\frac{1}{2}$ -1 mm. 長……………**オホユウガギク** *Kalimeris incisa* DC.
- 葉は卵狀橢圓形、鋸齒邊質厚く光澤あり冠毛は $\frac{1}{2}$ mm. 長……………

..... ヨメナ *Kalimeris incisa* var. *yomena* KITAMURA

尙オホユウガギクは牧野博士が九州久住山に産する植物に *Aster pinnatifidus* f. *robustus* MAKINO として發表されたものゝ和名でこれは冠毛がよく發達せるものでシベリヤより朝鮮を経て九州、中國に分布する *K. incisa* であると私は考へる。

ヨメナの内地にないのは既に中井博士の嘗て發表されたところである。THUNBERG 氏の日本植物誌の *Aster indicus* はヨメナであり FRANCHET 氏の日本植物總覽の *Aster indicus* はユウガギクである。尙ヨメナは種として *Kalimeris yomena* とも考へられる。

ヨメナ類は多年生即ち地下莖を出して其の先端に春に若苗を生じ夏にかけて苗は伸長して枝を出し枝頭に夏秋の候花を開き實を結び冬になると莖は枯れて地上部には新芽のみ残すが地中には地下莖が残り其の先端に若苗がある。尙地に落ちた種子は發芽して新植物を營む。莖の高さは種類によつて高低あり且つ同一種類の内でも筒体について色々變異はあれども 30cm.-150 cm. 位で、野外で多數の筒体を觀察すれば各種に自ら高さの限度のあるのを知る。葉は互生であつて其の質の薄いものや厚いものがあるが、これは比較的の言葉であるのでよく植物体につき比較考究すれば誰でも會得出来る。植物分類の専攻家なれば一寸指でさわれば又一見して直ちに理解されるが、さうでない方は多數の良標品を比較すると直ぐこの方法に慣れる。葉の形は卵狀楕圓形のもの披針形のもの色々あるが、この類では變異が多く目安とするには餘程困難である。ユウガギクにも葉が羽狀深裂するものが多いが、單に鋸齒邊のものもある。莖の下部の葉は開花の頃には役目が終つて枯れ中部上部のものが營養をやつてゐる、上部のもの程葉は次第に小さくなつて披針形全邊であり花の下部では總苞片に類似せる形となりこれを苞といふ。總苞片の内の一列は除き外の列は一般に菊科ではかゝる苞が重なつたものであると考へられてゐる。莖は枝を分岐して其の先端に頭狀花を着ける。ユウガギクを京都の畑で私は七年程も栽培してゐるが毎年ヨメナよりも開花が早い。開花期といふものは各種につき凡そ一定してゐるものであるが、日本の様に各地に氣候が異なる處では同じ土地に植えて比較せぬとわからぬ。其の土地の氣候と開花期は相對的のものである。台灣で春咲いてゐるものも京都では秋に咲く事がある。然し植えた翌年位では咲き續けたりする事があるので多年栽培せぬと正確な比較は出来ぬ。ヨメナの頭花は邊に一列ばかりの舌狀花があつて中部に筒狀花が多數ある。これ等の小花は周圍のものから咲き初め中心に向つて次第に咲き進む。菊科の頭狀花の咲き方は全部さうであつて中心から初まるものは無いので圖でも畫く時はそのへんの事を知つてゐるとよい。尙又枝の中では主軸から周圍の枝へ

と咲いて行くので小花の咲き方とは反対である。これなどは繪に誤りやすい。舌状花の舌状瓣の基部を見ると雌蕊が一本あつて其の先端が二又に分れてゐる、これは雌花であつて雄蕊はない、雌蕊の下には子房があつて其の子房の上に舌状瓣がのつてゐる。子房は一室であつて中に一つの卵子がある直立してゐる。これは倒生である、受精をすると種子になるが、菊科の他のものでは邊花の不稔となるものがあるのでこゝも注意すべき見處である。この舌状瓣を見ると先端が通常三つに分れてゐる、二つになつたものや殆んど分裂の不明なものもあるが、コウゾリナとかタンポポでは五つに分れてゐる。ヨメナの舌状花は筒状花の五裂片中三裂片が伸びて舌状になつてゐるので、タンポポ、コウゾリナでは全部の裂片がのびてゐるのだから同じ舌状花でも成り立ちが異ふ。筒状花は多數あるがこれは先端五つに分かれてゐる。開花前ではこの裂片は所謂鑷合であつて裂片のへりが重なつてゐない。この裂片の先端からまづすぐに脈が下に降るのが多くの花の脈の走り方であるが、菊科ではこれとは異なり脈は先端の眞下で左右に二つに分れ裂片のへりを沿つて各々裂片間の凹所で他の裂片の脈と落ちあつて合一して裂片間の凹所から下の方へすぐ降る。これは菊科一般にさうであるので、うつかり描いた圖ではこゝを宜敷やり過ぎて菊科に知識がないと思はれるから注意處である。もつとも菊科でも *Ligularia*, *Miricacalia* とか *Senecio* 群ではかすかに先端直通的脈があるがこれは例外でこの時でも裂片間の脈が明瞭である。ヨメナの筒状花は黄色で舌状花は紫、淡紫、白色である。舌状花と筒状花の色の異なるのを異花色 (heterochromus) と云ふ。アキノキリンサウでは同花色でこれは亞族が異なる。Aster 類で黄の舌状瓣は一般にないので園藝的にこれを出すことは大變困難な事、稀な事と一寸さういふ事も云える。筒状花の中には雄蕊と雌蕊と共にあつて両性花 (hermaphroditus) である。雌蕊は一本で棒状其の上部が二つに分岐し枝は少しく扁平で先端は三角状になつてゐる、この三角状のところを附屬体 (Styli appendix) と云ふ。こゝのところが形狀が分類に大切なので菊科の大分け(族)はこゝの形を用ひるのだからよく種々の菊科植物と比較するとよい。例へばタンポポでは二本の細長い棒である。この附屬体には小乳頭状の突起が擴大すれば見える。雄蕊は五本あつて花冠に着いてゐるが花冠裂片間にある、つまり裂片と互生してゐる。花糸があつて其の上に葯がある。葯は五つが互に癒合して筒状をなし其の筒の中に花柱がある。葯は内向で二室ある、この二室の間が葯隔でこの葯隔が上部へ伸びて各葯には三角状のものがついてゐる。この中に花粉はない、菊科の大部分はこの三角状のものがあるが、稀れにヌマダイコンの如くないものがある。葯の下部はヨメナでは鈍形であるが、アザミなどでは附屬体がある。この葯下部の附屬体が屬の分類には重要な役をするので各屬に

つき比較考究すればわかる。雌蕊の基部には盤があつて雌蕊の下をとりまいてゐるがヨメナでは見るに困難である、其の下に子房がある。両性花の子房で實を結ばぬものはカハラヨモギなどで見られるが、かゝる點も屬を分つに重要な特徴である。ヨメナでは全部稔る。果實は扁平で倒卵形であつて開裂しない。肉質ではない、果實が扁平であるか円柱形であるかは大切な特徴である。果實の皮を取り去ると中に直立した種子が出る、種子は薄い種皮をかぶり中に肉質の胚がある。幼根は下部につき円錐形で短かく、子葉が二枚上部にある。胚乳はない。果實には表面に毛が生えてゐる。果實の上部に短かい小杯状のものがある。これは冠毛の短くなつたものである。これは短かい剛毛がより集まつて下部が互に癒合して出来てゐるので、この剛毛の長さがヨメナの種類の分類には必要なのは上記の検索表に出してある通りである。コンギク類とは冠毛の長さが短かいので別の屬となつてゐる。だからコンギクと區別するには冠毛を見たらすぐわかる。若苗だつたら内地のヨメナは光澤あつて毛も少ないし、コンギク類は光澤なく毛があつてザラザラしてゐるから區別出来る。冠毛を他の科の萼に相等するものだといふ人もあるがさうでないといふ人もある。頭状花から小花をすべて取り去ると花盤があらわれる。小さい穴がぽつぽつある。其の穴の凹みに小花の子房の下部がついてゐた事を知る。この穴の縁がヨメナでは高くはないが他のものでは高くなつて縦に不規則に裂けてゐるものがある。これのよく發達したものがアザミで見られるがこれを花盤剛毛 (Seta receptaculi) と云ふ。この剛毛を他の科の苞であると云ふ人もあるが、さうでないといふ人もある。この頭状花序が穂状花序が短くなつて出来たと考へる人はこの剛毛をもとの穂状花序の小花の苞であると云ふし、繖形花序の小花の小梗が短くなつて頭状花序になつたと考へる人は苞と考へない。花盤の邊には總苞がある。この總苞は多數の總苞片より出来てゐるがヨメナでは大体三列程あるがこの總苞及び總苞片の形狀が分類上重大な役目をする。菊科の鑑定にはこの總苞の形狀で大体わかるので各屬種につきよく比較考究すればよい。

日本植物覺書

(J. OHWI: *Sertum Japonicum*)

大井次三郎

(5) ツルメヒシバ — *Axonopus compressus* BEAUV. はアメリカ熱帯の原産で現在では舊世界の熱帯にも生育して居るが今回琉球でも發見された。恐らくクリノイガと同様に渡りし者であらうが全形特に小穂が稍大形で長さ 2.5-2.7 mm. もあるのが著しい、しかし變化の多いものとの事であるから本種にあてゝも間違ひはないと思はれ